

新しい和歌の価値を創る

——「千年『和歌文化』を国際社会へ

和歌文化国際協会代表理事
博士(学術)Ph.D.

秦 澄美枝



「和歌」は一般に、一千年古の古典とされますが実は、平安朝に成熟した「歌詞」と「五七調韻律」で、今に至る全ての文学作品も芸能も箏曲等の歌も、近代の童謡から歌謡曲まで表現する「現代の文化」、歴史の思想・美意識を体系化した日本文化なのです。この新しい価値「和歌文化」を創造し将来の国際社会へ普遍化するべく、日本初の勅撰『古今和歌集』完成の延喜5(905)年4月18日と同日の令和7(2025)年、歴史上から第一となる和歌の法人「一般社団法人和歌文化国際協会」を創設しました。ここに理念のご理解を願ひ、そのテーマをご紹介します。

『古今和歌集』から始まる「菊」の日本文化史

日本人が最も愛で日本を象徴する花は菊と桜ですが、なぜ日本原産ではない菊が国花と憧憬されるまでになったのでしょうか。菊は、大和朝廷時代に中国大陸から伝来し、葉草として珍重されました。中国では漢代から、河南省鄭県を流れる菊水(菊潭)の水は川上の崖に咲く菊の露が滴り落ちて甘く美味、不老不死の命を授けたとの菊慈童伝説があり、吉数が重なる最もの吉日、9月9日に延寿の功ある菊花酒を飲む「重陽」の節が生まれました。日本にもこの節は伝わったものの、奈良時代までは漢代風のままを行なうのみが一転、平安時代を開いた桓武天皇は新しい日本の創建を目指し、その政治を「菊の和歌」に残します。そして平安朝百年、政策として「倭の国の歌」となる「和歌」を興隆さ

せた宇多法皇が「菊花自体の美しさ」を発見、多くの「菊合」歌会を催し、宮廷歌人達に菊花を詠む和歌が多彩になりました。皇子醍醐天皇も「日本語」を創る国策のもとで『古今和歌集』を撰集、和歌史で初見の十首以上もの「菊の和歌」が入集します。『百人一首』で有名な「心あてに 折らばや折らむ 初霜の置き惑はせる 白菊の花」(凡河内躬恒)は、「菊それ自身の美麗」を「霜」の透明感に詠み『古今和歌集』に撰ばれた名歌です。そうして平安朝の末、菊慈童伝説から重陽節供となった「永遠への祈り」を、『古今和歌集』以来に美と聖を内包してきた「歌詞」で詠む賀歌が確立します。

仙人の 折る袖匂ふ 菊の露
打ち払ふにも 千代は経ぬべし

(『新古今和歌集』・藤原俊成)

伝説に誘われた仙境で菊の露の香に包まれながら、仙人が「千代」を寿ぐ(非日常)の世界――。

この和歌が入る勅撰和歌集には、「菊の白露」に阿弥陀仏を想って極楽浄土の往生「魂の永遠」を願う釈教歌「説く



菊 葉袋 (松岡松華堂蔵)
〔王朝人の四季―平安の年中行事と斎宮―〕斎宮歴史博物館

御法きくの白露夜はおきて つとめて消えむ ことをしぞ思ふ(慈円)も入りました。源平合戦での無常観から生まれたこのような和歌以来、菊は和歌での「祈り」を本質に、あらゆる日本文化の中で、その荘厳な美に重陽の「永寿」を象徴してゆくの

乱時に即位した歴史上稀有な文武両道の上皇で、十六葉八重表菊形を押し太刀「菊御作」を自ら打ってお印とし、天皇紋章を創り、十四代後の醍醐天皇がそれを正式に定めたと伝わりま

政権が武士に移っても徳川家康は名を家康と改めたその年、重陽の和歌「幾千年 籬の菊の色に香に 君が今年の 栄え増すらむ」(戦国時代和歌集)を詠み、武士・庶民にも菊節供を奨励、江戸時代に「菊文化」は普く日本人皆の慶賀となりました。

ですから近代で明治2(1869)年に定まった皇室の紋章も後鳥羽上皇の、昭和元(1926)年以来パスポートに描かれる日本

人と日本の象徴も菊になったのでしよう。現在、日本社会の「平和」は国の存亡となる危機を超越してのもので、昭和天皇は、昭和27(1952)年、生涯至高の慶びを「平和条約発効の日を迎えて」の詞書で、歴史的五首に残しました。その一首。

冬過ぎて 菊桜さく 春になれど
母のすがたを え見ぬかなしさ

(『おほうなばら 昭和天皇御製集』)



秦澄美枝書 (文化庁後援「文化人・芸能人の多彩な美術展」)
「風かよふ 寝ざめの袖の 花の香にかをる枕の 春の夜のゆめ」

「『菊』桜」に象徴した「平和」な独立国日本への慶賀と、絶望を共にしながら前年に崩御した母后貞明皇后

への悲しさも一首に込めます。母後の無常ゆえに、一千年日本人が重陽「菊」に象徴した「永遠への願い」は一層深まり、各国が外交で平和世界を形成する祈りまで仰望されました。そして「平和と文化を愛する日本人の祈求」は永久へと。『古今和歌集』で初めてその美が発見された菊は、重陽で願う永寿への祈願を本質に、時代毎の美意識も思想も象徴しては歴史を超えて遂に、日本人と日本を象徴する花に尊ばれてゆきました。そこには、自利ではなく、社会全体の「幸いを祈る」「和歌の本来」と一つの、「菊の本性」があつてのこと。菊はこのような時の流れの中で、「和歌文化」の一典型を完結したのです。

「和歌文化」を国際社会へ

「和歌文化」体系の一つを展開しました。日本の「美」が、社会全体の「聖」なる祈りに昇華しています。この、人間にとって「普遍なる尊さを志向する心」こそ、他のどの文芸とも次元を異にする「和歌の本質」で、それゆえ、和歌は、現在から未来の国際社会へ「普遍化する価値」となるのです。最後、皆さまのご共感を願ひ、その理想社会への和歌を拝見します。

平成の御代を迎えて后に立たれた美智子様が、平成2(1990)年、新しい代に向かい新帝と国民皆が「平らけき代」を創る希望を詠まれましたが、この後の両陛下の「ご慰霊のお旅」を想う時、御歌からは国際社会各国が創る「平らけき代」まで展望が広がりました。その実現を希求しつつ、和歌韻律の美しい響きを感じなさっていただければ幸いです。

平成
ともどもに 平らけき代を 築かむと
諸人のことば 国うちに 充つ

(『皇后美智子さま 全御歌』)